その他

臨時休業に伴う学習の状況について

学びの改革支援課

１　学習進度の様子

休業なく６月末まで登校できていた時の通常の学習進度を 100%とした場合、６月末までに実際に学習できた進度

※（　　）は５月末の状況

校　　種	小学校 357 校	中学校 188 校	高等学校 82 校
全県平均（%）	64.6 (32.3)	61.7 (32.1)	61.6 (42.7)
80%以上進めることができた学校数	79 校　22% (12 校　３%)	34 校　19% (13 校　７%)	10 校　12% (３校　４%)
20%以下の学校数	４校　１% (94 校　27%)	０校　０% (75 校　40%)	１校　１% (13 校　16%)

※小学校は、平均でおよそ3.5週（102時間程度）の遅れ
※中学校は、平均でおよそ3.8週（110時間程度）の遅れ
※高等学校は、平均でおよそ3.5週（104時間程度）の遅れ

２　学習の遅れを取り戻すために各学校が検討している取組

項目	学校行事の中止や短縮等の見直しを行い授業時数を確保する	夏期休業を短縮して授業日数を増やす	放課後等の時間を活用して補習を実施する	１単位時間を短縮して授業回数を増やす	土曜日に補充授業を実施する	遠隔教育により学習を進める
小学校 357 校	350 校 (98%)	355 校 (99%)	67 校 (19%)	67 校 (19%)	１校 (0.3%)	10 校 (３%)
中学校 188 校	186 校 (99%)	185 校 (98%)	51 校 (27%)	54 校 (29%)	３校 (２%)	17 校 (９%)
高等学校 82 校	80 校 (98%)	82 校 (100%)	25 校 (30%)	５校 (６%)	18 校 (22%)	18 校 (22%)

３　「学びの継続計画」の策定状況

校　　種	小学校 357 校	中学校 188 校	高等学校 82 校
県が例示した「学びの継続計画」を作成した、または作成中の学校	162 校 (45%)	90 校 (48%)	63 校 (77%)

コロナ禍を超えて学びを進める取組　小井川小学校

岡谷市立小井川小学校では、子どもたちの学びを充実させるために、学校全体でカリキュラムマネジメントに取り組みました。先生方は感染症への対策を講じつつ主体的な学びが実現できるよう、様々な知恵を出し合いました。

授業時数削減を踏まえた指導計画の見直し

長期の休業により指導時間が減り、カリキュラムの再編成を迫られました。この機会を前向きに捉え、単なる効率化ではなくより質の高い学びの実現に向け、国語と算数の教科書を各学年２社ずつ取り寄せ、自校で使っているものと合わせて３社の教科書を比較する研修会を行いました。そこでは、子ども自身が学びを自分の事としてとらえることができるためには、どのように教材と出会い、教師はどのような指導をしていくことがよいのかを検討しました。

＜先生方の感想＞

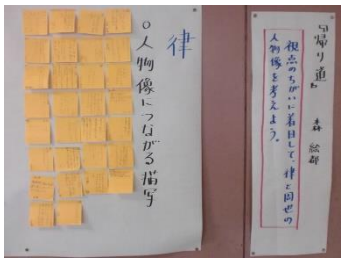
教科書によって分数と小数の学ぶ順番が違っていることに気が付いた。小数から入る教科書が多いようだが、身近なところにある小数を見つけるところから入ると数に親しんでいくことができる良さはあるのだろうけれど、分数から入った方が10分の1は1を10に割ったものだから0．1と同じになるというように、単位数のいくつ分という数の概念を理解しやすく、分数と小数のつながりを持たせやすいのではないかと思った。

感染症対策を取りつつ協働的な学びを実現するための工夫

感染症対策を取りつつ、子どもたちがかかわり合い考えを広げたり深めたりすることができるように次のような工夫をしました。

○各教室に設置されているプロジェクターを使用し、考えを記した児童のノートを大きく映し出しました。間隔を保ちながらも互いの考えを見合うことができるようになりました。

○自分の考えを付箋に書き、それを模造紙に集めて貼りました。従来のように対面で考えを伝え合う機会が取りにくい状況ですが、互いの考えを知り合うことができるようになりました。自分と同じ考えや違う考えを把握するだけでなく、その考えをもっている友達は誰なのかにも意識を向けている様子がありました。自分の考えに友の考えを取り入れ合ったり気づき合ったりできることが見えてきました



授業後、この模造紙を廊下に張り出したところ、隣の学級の児童が付箋を見て考えている姿がありました。付箋を使った考えの共有は、さらなる学習の工夫の可能性を感じました。

小井川小学校では、先生方が協働し、この状況下でも子どもたちが豊かに学び合うことができるようアイディアを出し合いながら工夫しています。誰も経験したことのない状況ではあっても、子どもたちのために「一人の十歩よりも十人の一歩」大切にした取組を進めていこうと考えています。

臨時休業中に身に付けたオンライン授業のスキルを活かして、教室外でも学びの場を保障する取組　軽井沢町立軽井沢中学校

軽井沢町立軽井沢中学校では、臨時休業中に、試行的に中学校３年生に向けたオンライン授業を行い、「学びの保障」に取り組んできました。その取組を生かし、通常登校が始まってからの授業でも、臨時休業中に得たノウハウを生かし、教室に入れない生徒や不登校傾向の生徒のために、教室外でもみんなと同じ授業を受けられるようにするオンラインの活用に取り組んでいます。

臨時休業中のオンライン授業の様子

５教科の先生方は、教科会を上げてオンライン授業に取り組みました。担当するクラスの先生が授業を行い、他の先生方が機械操作をサポートしたり、生徒の出欠を確認したりしました。

授業の良さを学び合うとともに、オンライン授業に向けた授業づくりを教科会全員で取り組むことで、教科内でのコミュニケーションがこれまで以上に高まり授業改善にもつながりました。

通常登校が始まってからのオンラインを活用した多様な授業参加の模索

①　学級での授業が困難な生徒へのオンラインを通した「学びの保障」

理科室のすぐ横に用意された学習スペースで、オンラインを通して教室で行われている授業を受けています。これまで、相談室等で授業を受けていた生徒は、教室とは別の課題に取り組んでいました。軽井沢中学校では、ICT を活用して同じ授業を受けることができる体制づくりを進めています。

食い入るように画面を見て授業を受ける姿から、授業を一緒に受けている充実感が伝わってきました。オンラインを通した授業参加が生徒一人ひとりに学びを保障する一つの方法であることが見えてきました。

②　不登校傾向の生徒へのオンラインを通した「学びの保障」

通常登校になっても、事情で県外から戻ることができず、登校できない生徒に対して、軽井沢中学校では授業の同時配信を行いました。生徒も教師も顔が見える安心感があり画面越しにかかわりをもって授業を進めることができました。

軽井沢中学校では、この取組から、不登校傾向の生徒に対しても、今後本人の意思を確認しながら、家にいても、みんなと同じ授業を、みんなと同じ時間にオンラインを通して受けられるようにする取組にチャレンジしたいと考えています。

コロナに負けない・ICT を活用した生徒会活動の工夫（松本県ケ丘高等学校）

1　初めに―オンライン文化祭はゴールではない

６月 26 日（金）から４日間、本校は「オンライン文化祭」を実施した。本校では、同窓会の一組織である「縣陵の学びを支援する会」や東京同窓会等から WiFi 環境整備等の支援をいただき、入学時に生徒が購入するタブレット端末を活用して日頃から ICT を活用した学びを行っている。

だが、「一人一台 iPad を持っているから」「校内に WiFi が整っているから」だけでは、ここまでの活動には発展しなかった。生徒たちがもともと持っている自治活動への高い意識と、探究的な学びのこの２年間の取組の成果が、コロナ禍とあいまって形になったのだといえる。

右図は今年度の生徒会の方針を描いたものだが、“縣陵生の種”が大きな石に阻まれても芽を出している。この図が示すように、ある日突然オンライン文化祭があるのではない。また、文化祭がゴールではなく、花が咲くのはまだ先である、というのが彼らの意識にはある。図には「０（ゼロ）にはしない Spirits」という副題がついているが、根っこにあるのが「縣陵三大精神」であり、先輩から受け継がれたものを自分達の代で途絶えさせないという意思、困難でもあきらめずに挑戦する生徒の姿勢がここに表れている。

（図：「どんな花が咲く 2020 Team 縣陵生徒会 ０にはしない Spirits」）

2　４月以降の生徒の活動―「新しい生活様式」を意識

(1) オンライン対面式

４月６日（月）、三密を避けるため、新入生を歓迎する対面式をオンラインで実施し、生徒会長の歓迎の言葉や学校生活の紹介などを生徒会室から各教室の電子黒板に配信した。画面がフリーズしたり、スムーズに流れなかったりするトラブルはあったが、この時の経験が後にオンライン縣陵祭に活かされることになる。

(2) 新しい「クラブ説明会」

各クラブの活動の様子や新入生歓迎のメッセージ等を動画で作成し、新入生が昼休みの教室で視聴できるようにした。

(3) 新しい「応援練習」

６月８日（月）・９日（火）に実施。声を出して飛沫が飛ぶことを考慮し、三密にならないように、学年を二つに分けたり、教室と校庭で場所を交代したり、気温も上がるので熱中症にも配慮して実施した。工夫を重ね、日程こそ二日間に短縮したが、何とか伝統の行事をやり遂げることができた。形を変えても、予定の行事をひとつひとつ実施することの積み重ねが生徒の自信となっていったようだ。

(4) オンライン生徒総会

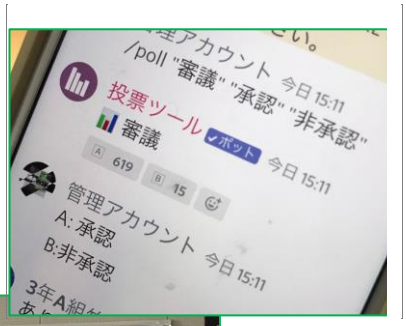
例年は４、５月に生徒総会を開いて、本年度の活動や縣陵祭の計画・予算などを審議する。休業がいつ明けるか見通しがつかない中、生徒会役員は週１回オンラインで役員会議を続け、学校再開に備えていた。

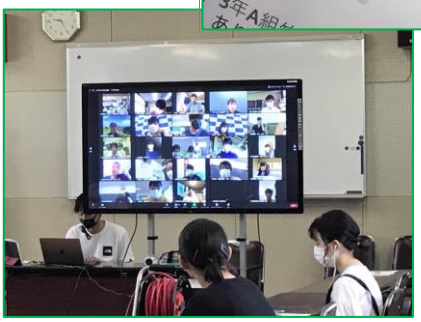
縣陵祭をやるのかやらないのか、またやるとしても生徒総会で承認を経なければ実施できない。５月 22 日（金）15 時からオンライン生徒総会を実施。大人数が参加できデータ共有も可能な音声チャットアプリ「ディスコード」と「YouTube ライブ」を併用し、議事の資料は事前に共有。全校 957 名中 937 名が自宅からスマートフォンやタブレット端末を使って「出席」し、総会は成立、予算案など議案への投票を実施した。この場で文化祭でもオンラインを活用する方針を示した。議案への承認を呼びかけると、賛成の数字がどんどんと伸び、過半数に達すると「承認されました」と議長がアナウンス。総会は 30 分ほどで終了した。

(5) 「県高校生徒会交流会」を zoom で実施

6 月 13 日（土）、県内約 40 校の生徒約 140 人が参加。中信地区の高校は 2016 年から生徒会役員の交流会を開いてきたが、今回はこれを全県に広げて、ウェブ会議システム（zoom）を使って実施。５つの分科会に分かれ、本校の生徒がファシリテーターとなり議論した。コロナウイルスの影響で生徒会活動に制約がある中、文化祭などの行事をどう運営するか、共通する悩みの解決策を出し合った。参加生徒から「思うように活動できず悩んでいたが、悩みを共有し、不安を解消できそうな気がした」という感想が聞かれた。遠く離れた学校の生徒が気軽に集えるのは、このシステムの大きなメリットである。

右：生徒総会での採決の様子





左：生徒会交流会の様子

3　オンラインでの文化祭（縣陵祭）

(1) 開祭式・前夜祭・後夜祭は体育館から「中継」

生徒は各クラスの電子黒板で視聴。対面式の反省を生かし、事前に回線状況をチェック。各クラスとも、画面がフリーズする等トラブルなく、安定して視聴できた。

開祭式や前夜祭の様子は大体育館から中継。
体育館での「三密」を避けるための工夫。

(2) 一般公開はせずに生徒は自宅から縣陵祭に参加（６月 27 日（土）・28 日（日））

①生徒会が配信する YouTube ライブ視聴
②インスタグラムによる展示発表
（文化系クラブ作品、探究科研究発表など）
③アプリ「cluster」を使用した、バーチャルリアリティ（仮想現実）展示
④市内コミュニティＦＭ局「エフエムまつもと」で生徒制作の 30 分番組の放送（土日各１回）
⑤地元紙「市民タイムス」の紙上文化祭（QR コードで動画再生）

著作権の関係で限定公開としたが、高校生が一生懸命取り組む姿に地元企業も賛同してくれ、④や⑤のような協力を得られたことは大きかった。保護者や近隣中学生等、幅広く楽しんでもらうことができた。

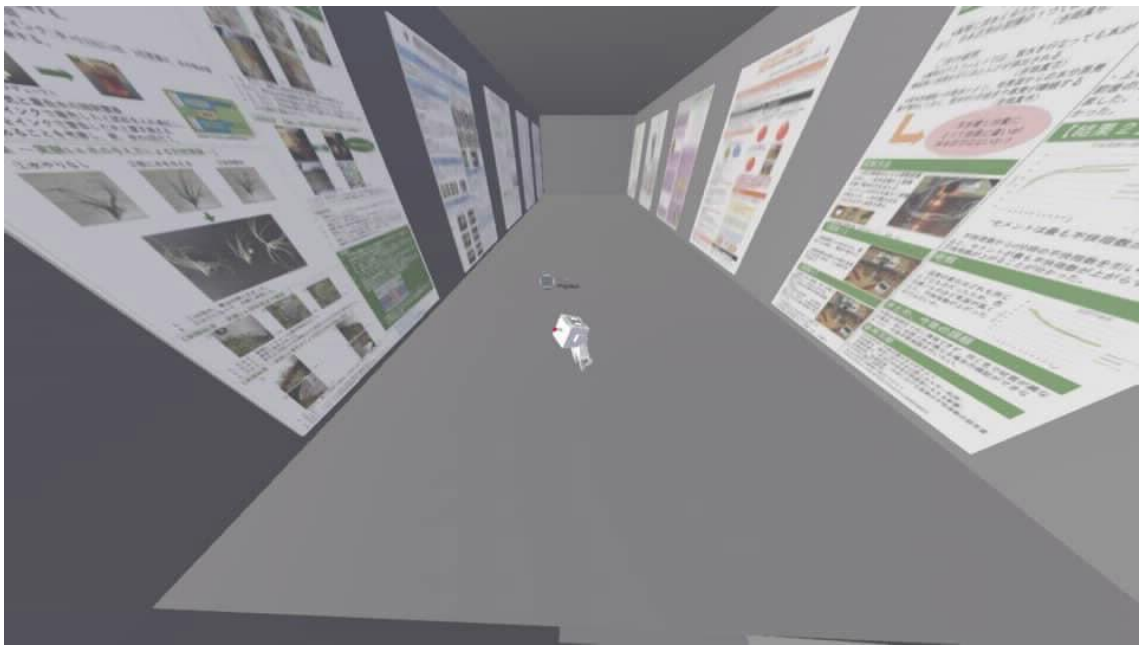
4　生徒と私たち教員のこれから

生徒会役員の３年生が、「いつも通りに行事ができないことは辛く、コロナさえなければ、と恨んだこともあったけれど、考え方を変えて、コロナのおかげでこうして新しい世界を体験することができ、やるだけやり切れて本当に良かったと今は思っている」と感想を述べていた。どんな困難に突き当たっても、乗り越えていける自信がつき、そしてその精神は後輩にも受け継がれていくだろう。

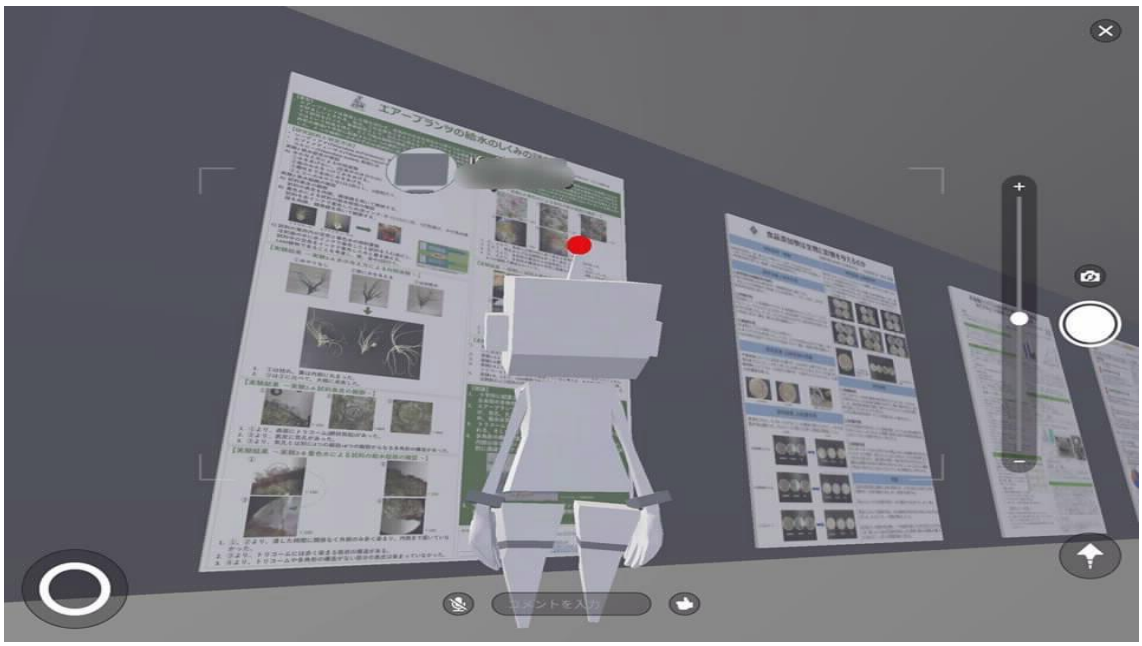
今の高校生が大人になって迎えるこの先の社会は、予測不可能で未知の困難な問題に遭遇することだらけだ。それを切り拓いていく力をつける「学び」を、これからも大切にしていきたい。オンライン文化祭はあくまで通過点。ICT はツールであり、使いこなすのは人間である。

アプリ「cluster（クラスター）」について

　スマートフォンやＰＣ、ＶＲ機器など様々なバーチャル空間に集まって遊べる、マルチプラットフォーム対応のバーチャルＳＮＳ。音楽ライブや発表会などのイベントの他、いつでも参加できるバーチャルワールドやゲームなどで遊ぶことができ、数万人が同時に接続することもできる。

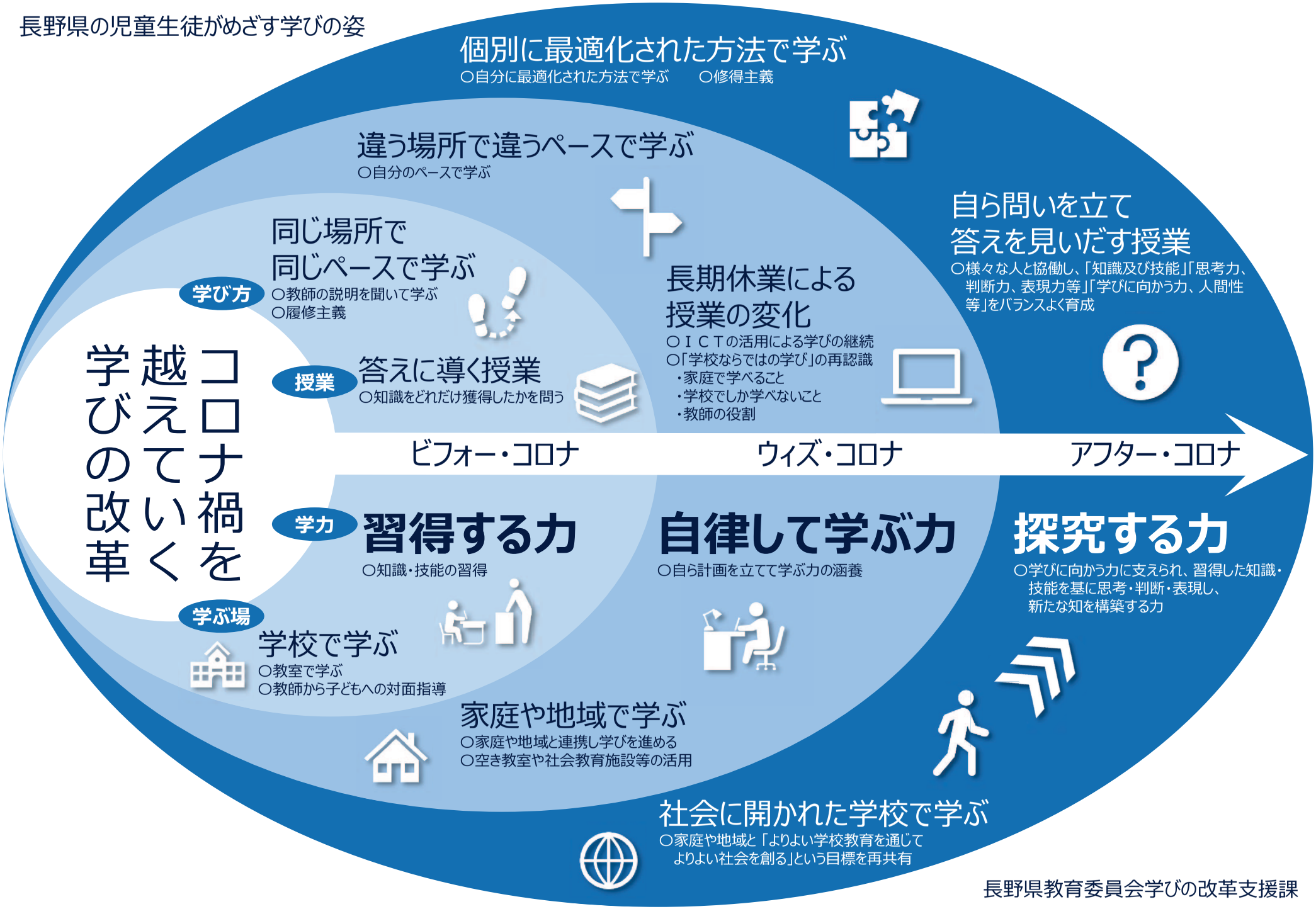


「ワールド」の中に作品を JPEG 形式で貼り付けをし、展示空間を作成する。（動画は不可）



「１ワールド」に展示できる作品は 10 作品程度。画面上の自分を動かして作品を見る。

長野県の児童生徒がめざす学びの姿



長野県教育委員会学びの改革支援課